

忠節橋 project

- 川の記憶のデザイン -

Chūsetsu-bashi Bridge project

- Design for Place and Time -

今井 裕夫

Hiroo IMAI

Abstract

The current Chūsetsu-bashi Bridge was built in 1948 and is the oldest standing bridge in Gifu City. Historically speaking, the Nagara-bashi Bridge was actually the first bridge to be built, but it has been reconstructed several times. Even though the Chūsetsu-bashi Bridge was the second bridge to be built in Gifu City, the structure now standing has the distinction of being the oldest surviving bridge. There are many splendid views of the Chūsetsu-bashi Bridge. One of these is along the route from Tenjin-machi to the Enmei Jizōdō statue. As the path turns left and rises gently, the beautiful arch of the bridge becomes visible. Another beautiful view of the bridge can be glimpsed from the wooded area in which the Tenmangu Shrine is located. This paper presents a plan for the development of this approach to the Chūsetsu-bashi Bridge.

Keywords : アーチ橋、Sunset、Organic Unity

要約

忠節橋は岐阜の市街地の長良川に架る橋の中では、歴史に見れば長良橋について二番目に古い橋である。現存する橋では一番古い。天神町通りから延命地藏堂を左に折れて、なだらかな坂道の住宅街を登りきると右側に美しいアーチ橋をのぞむことができる。忠節橋である。左手には大木を宿した天神の杜が場を構成している。天神町通りを北へ直進するかたちで、初代の忠節橋は作られ、左折して堤防上に出る処で二代目の忠節橋は架けられた。その橋は真

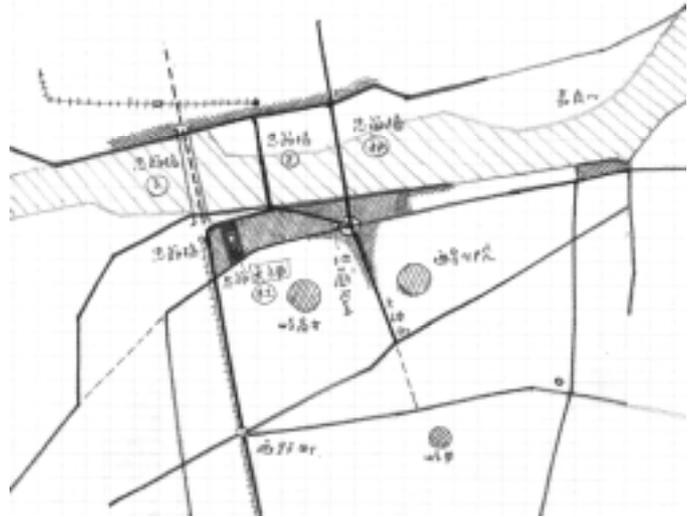
砂町通りが長良川で終点する処で右折し堤防道路上で交点する。三代目忠節橋は真砂町通りを北へ直進する形で架けられ西野町から坂道が作られ、早田本町へと下降する。この3本の橋の推移が、二代目忠節橋を峠として、延命地藏堂と天満宮の杜を川の気配で繋ぐ景観と街並を形作っている。この景観と街並の構造を読み解くことからのこの場所の魅力の再構築を計画した。



川の記憶のデザインとして計画された忠節橋 project は、四ツ屋公園 project、長良川 project に続いて、場を構成する歴史的経緯やその名残をキーワードとし場所の周囲に点在する記憶のエレメントを再構成することで全体としてのまとまり、場の活(イキ)の再生を意図するものである。単に今となっては散在するエレメントを精査し、それらを厳密に再構成することにより場の復元を計るものでなく、まとまりのないエレメントの萌芽点のみを細密に五感(ゆるやかに呼吸すること)により内部化し、場としての心象を形象化する試みとしての計画である。

歩くこと、呼吸すること、見ることの順に雰囲気の甦生に循環系の経路(骨組)としての空間の質の回復を重視した。

一般に多くの街づくりの計画や施設の計画が最初の計画のこと志とは違って、手馴れた手順や判断力によって完成した時点でその魅力を半減し、さらにその運用の手堅さにより、さらに硬直化してかたちばかりが残る、所謂、形骸化の結果を招いていることが多い。そこからの脱却の方策として、文学や芸術、歴史、民俗、風習、他、歳時記的な行事を環境におりませた生活を基盤とした街の魅力の再生に対する再考が必要である。かつて、徒歩や自転車で成立していた幾町内からの商店街の生き生きとした復活が生活空間としての場の魅力の再生であり、忠節橋の一隅に構想する。



[初代] 1884 明治 17 年 5 月

[2 代目] 1908 明治 41 年

[3 代目] 1948 昭和 23 年 8 月



大松屋前 明治末頃¹⁾

場所と地勢の理解

1. 初代忠節橋（有料橋）

忠節延命地蔵尊縁起、鷲津軍一の[忠節延命地蔵尊について]²⁾の記述によれば、200年程前から、まずこの地に延命地蔵尊は在り、道標の脇侍の地蔵尊には右肩に谷汲道、左肩に京道と刻されている。この地蔵堂を基点として東へ忠節橋通、南へ天神町通が交差している。北へ天神町通りが伸びるかたちで、初代忠節橋が架橋されていた。木造の低層のトラス橋で橋の袂は杵木筏集積の場所となっていた。川が運輸の中心であり、川岸には荷上げ場があり、そこから馬による荷車運搬が通常であった。橋の袂は対岸からの運送、対岸への運送の中継地としての商店街が形成され、米問屋、肥料店、馬車引きの人達に対する休憩所（支度店）飲食店、蹄鉄工場、タバコ屋、料理店、倉庫が堤防から天神町にかけて並んでいた。

初代忠節橋³⁾

2. 二代目忠節橋

延命地蔵尊から忠節町通りが西へ延長して堤防を登り切った処に二代目忠節橋が架橋され、木、鉄混構造のトラス橋であった。橋が西に寄ることにより形成された坂は、忠節四丁目坂と呼ばれ、坂の堤防側には商店街が形成され、忠節四丁目の堤防下の忠節町通りからの延長は住宅街を形成していた。堤防の玉石垣に沿っては建設会社の材木置場、柳や桑の林と空地であった。橋が西に寄ることにより、長良川の堤防下で行き止りになっていた真砂町通りと名鉄の市電、忠節橋駅から天満宮とその社を巻き込むかたちでの西側からの橋へのルートが開かれ、橋を渡っての名鉄揖斐線への電車の乗り換えがあり、対岸（右岸）での堤防上の商店の存在、松やネムの木のある堤防上ののどかで賑わう景観や環境が古い写真から察することが可能である。帆船の行き交う、野草が咲き乱れ、子供達が川で遊ぶ環境が橋の袂に展開している。

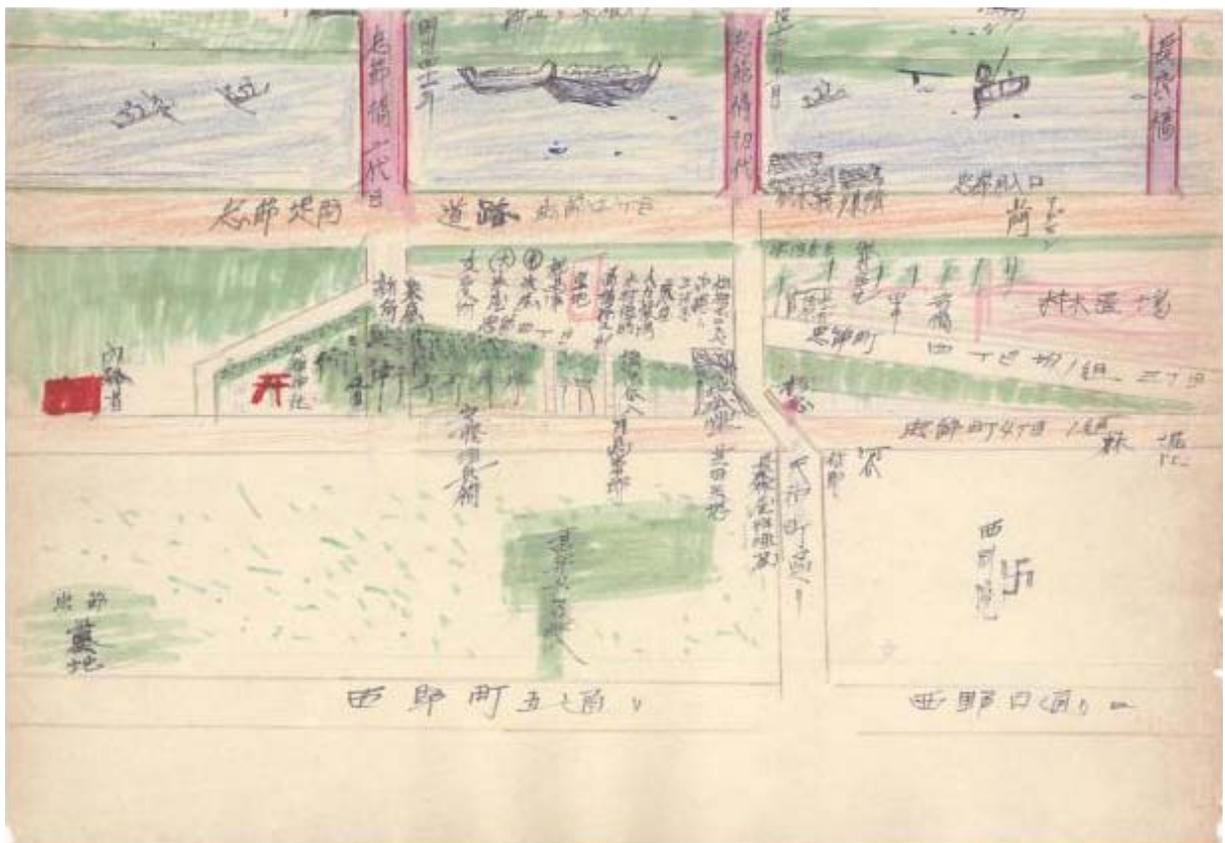
二代目忠節橋⁴⁾

3. 三代目忠節橋（現橋）

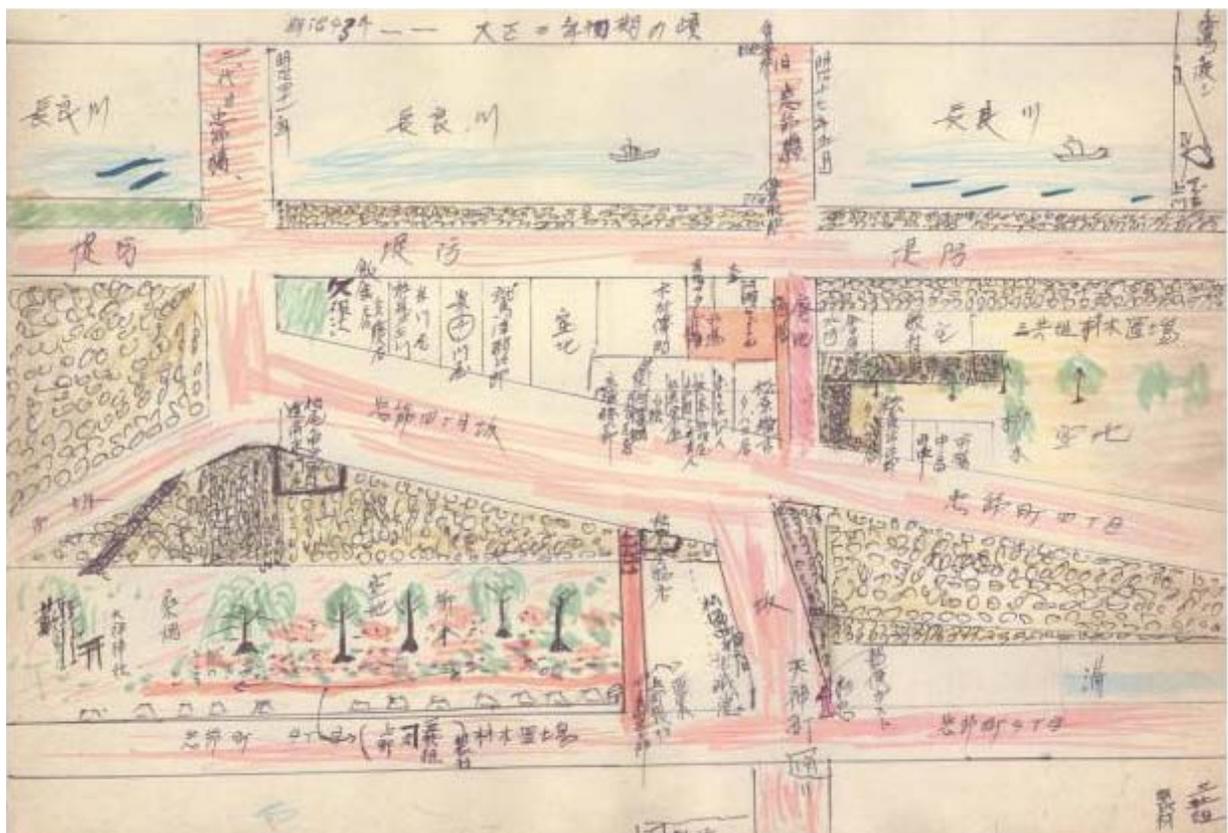
太平洋戦争中に架橋が始まり戦後昭和23年3月に竣工した。鉄骨のアーチ橋。鉄骨のラチス梁の多用とリベット鉋の美しさが印象的である。市街地に架る橋としては一番古く、唯一のアーチ橋である。岐阜市の景観を大きく印象づけるオブジェとして位置づけたい。夕景を背にしてアーチ橋のシルエットや伊吹山や遠くの山脈を背に銀白色に輝く美しい鉄骨のフレームは景観の財産である。揖斐線の忠節駅が長良川沿いにあったのは私の記憶にもあるが、現忠節駅から早田本町一丁目あたりの坂道で市電と揖斐線が一本化されて、西野町までの商店街が連続した頃があった。現在、市電はなく商店街がどこか寂れた。

生活空間としての“街づくり”の活性化が、川を取り巻く環境への人間の回帰によりはたせないものかというテーマがこの橋の袂に立つ時、1本の柳の木の消滅と共に浮上した。

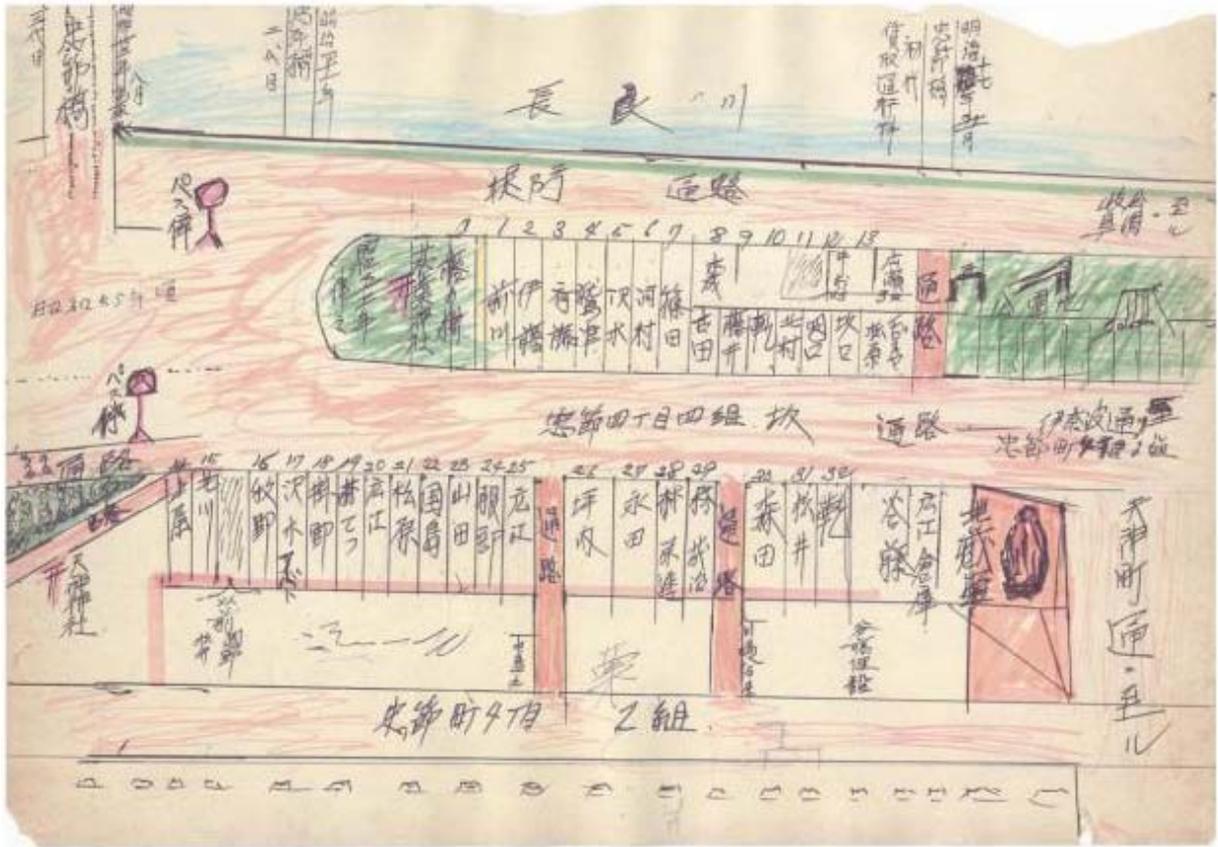
三代目忠節橋⁵⁾



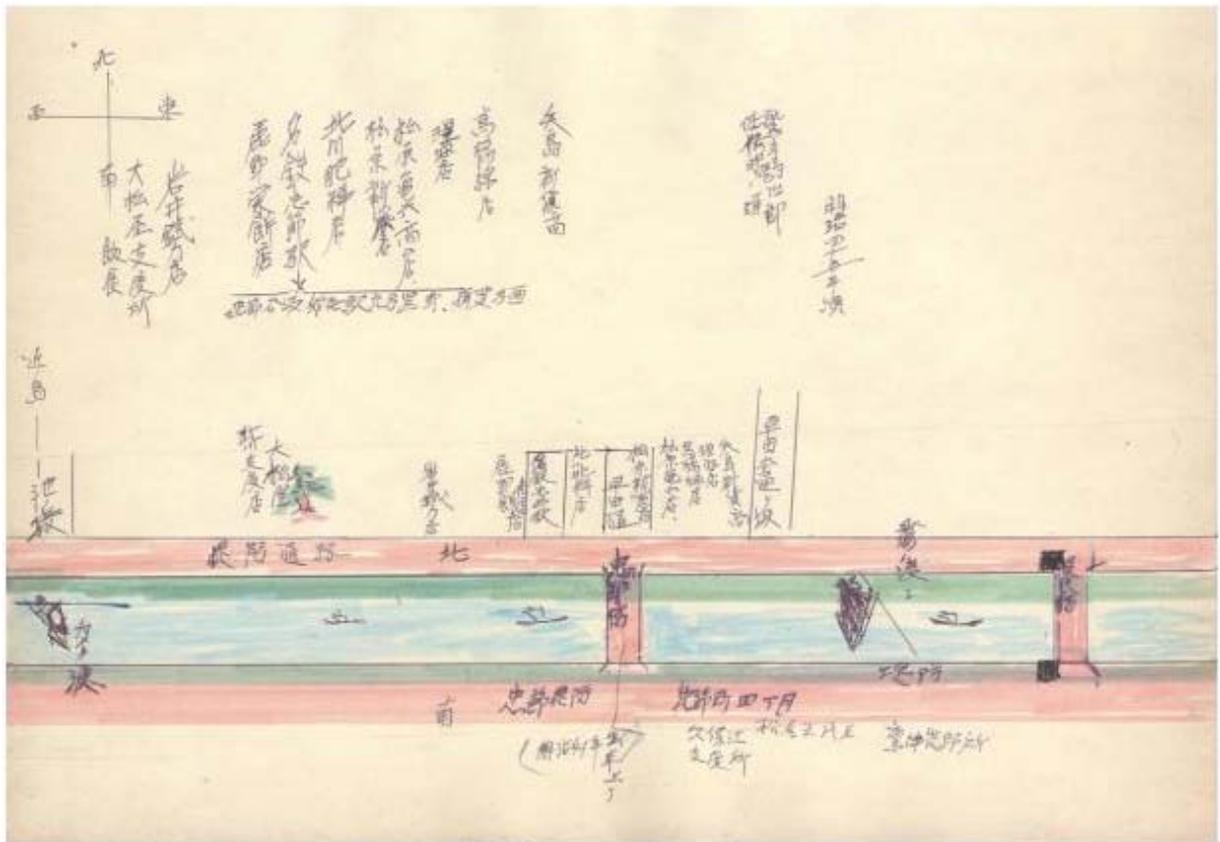
驚津絵図 6)



驚津絵図 7)



鷺津絵図 8)



鷺津絵図 9)



現況取材圖



概念圖

